

リハビリテーション学部 2024 年度ティーチングポートフォリオ

理学療法学科

氏名	職位
吉本好延	教授
金原一宏	教授
津森伸一	教授
矢倉千昭	教授
根地嶋誠	教授
俵祐一	准教授
矢部広樹	准教授
高橋大生	助教
高山真希	助教
田中なつみ	助教

作業療法学科

氏名	職位
新宮尚人	教授
顧寿智	教授
泉良太	教授
藤田さより	准教授
鈴木達也	准教授
佐野哲也	准教授
飯田妙子	助教
栗田洋平	助教

言語聴覚学科

氏名	職位
谷哲夫	教授
小坂美鶴	教授
大原重洋	教授
黒崎芳子	准教授
佐藤豊展	准教授
KuramotoChristineDianne	准教授

氏名 吉本 好延

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
キャリアデザイン(リハビリテーション学部)	102	神経系理学療法治療学	42
臨床理学療法評価実習 I	42	神経系理学療法評価学	49
理学療法学総合演習	47	臨床理学療法総合実習技能評価	42

2. 理念

課題を解決する力を育成する。

3. 方法

- ・シラバスへの課題提示→事前学習（個人）→webclass の掲示板を用いたフィードバック→グループワーク（授業）の手順で学習を進める
- ・事前学習課題はやや難易度を高め、授業での講義は理解しやすく（20 分程度）
- ・定期的に小テストを実施するが、ポイントは出題範囲が今までの授業で行った範囲が全てになるので、後半の小テストほど範囲が広い（重要な個所は何度も聞き方を変えて聞く）
- ・他の科目と連動（キーワード学習の時期を考慮した授業時間割の構成）

4. 成果

- ・授業内容は比較的に難易度が高いと思われるが、事前学習を徹底しているので、授業の理解度は悪くないと思われる
- ・小テストでは重要な個所を何度も確認するので、特に重要な内容の理解度は高い
- ・一方で下位層の理解度をさらに引き上げる戦略が必要。

5. 改善

- ・下位層の理解度をさらに引き上げる戦略が必要だが、本科目に臨む前の学力向上を目的に、他の科目と連動した学習計画が必要→2 年生秋のキーワード学習との連動は良かったと思う。神経系の前提科目をあげ、該当の授業の内容にもテコ入れが必要。

6. 教育活動

氏名 金原 一宏

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
物理療法学の理論	49	臨床理学療法総合実習Ⅰ	46
物理療法学の実践	49	理学療法研究の理論	42

2. 理念

2年生の専門科目である。

理学療法上問題となりえる症状の原因と臨床症状の理解を深める。

治療効果をえるために患者へ説明できるよう、体験を深めて治療場面をイメージしやすいよう講義実施する。

3. 方法

授業方法は、デモンストレーションと体験を取り入れ、1年時に学習した生理学、解剖学、運動学をもとに、物理刺激がどのような論理で生体の改善効果を図れるかを体験し、学習している。

4. 成果

2024年度は、GPA 2.2であった。

前年度と比較すると上昇している。

本科目は、秋セメスターに実施する物理療法学の実践に繋がる講義であり、物理療法を実践をするための理論を深められるよう講義する。

5. 改善

本年度は、物理療法に必要な炎症、疼痛、拘縮、筋緊張について、復習をする機会を設けた。さらに、個別学習を実施したことで理解を深めることができた。

6. 教育活動

1年生副アドバイザーを務め、主として地域貢献推薦センター長として、教育委員会と協力し本学学生が、中学生に対する部活動指導者となれるよう支援した。サークル活動は、バスケットサークル顧問を担い、現在、palpationサークル活動も講師として支援している。

氏名 津森 伸一

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
情報処理(月 1・津森)	45	情報処理(月 2・津森)	35
情報処理(月 6・津森)	41	物理学	13
基礎物理学(PT・OT)	16	基礎物理学(ST)	14
データサイエンス入門(看護 A②)	42	データサイエンス入門(看護 B②)	41
データサイエンス入門(PT)	43	データサイエンス入門(ST)	21
情報処理基礎	11		

2. 理念

各学生の理解状況に応じた授業をデザインする。

3. 方法

学習レディネスを一定の水準以上に揃えるため、「物理学」「基礎物理学」においては反転授業を実施し、NHK が提供する動画教材の視聴を推奨した。また、担当する全科目で、全てのリアクションペーパーに個別にリプライすることにより、授業中の疑問点の解消に努めた。

4. 成果

「物理学」「基礎物理学」の授業は比較的円滑に実施できたが、成績向上には余り繋がらなかった。「情報処理」「インストラクショナルデザイン」については、従前より学生のスキルは上がってきたように思われる。

5. 改善

レポート作成の機会を増やしたい。

6. 教育活動

氏名 矢倉 千昭

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域実践アクティブラーニングⅠ	87	地域実践アクティブラーニングⅡ	16
地域実践アクティブラーニングⅢ	6	地域理学療法学の理論	41
リハビリテーション職種間連携の基礎	106	臨床理学療法見学実習	43
地域理学療法学の実践	41	日常生活活動学の理論	49

2. 理念

- ・学生が主体的かつ能動的に学修し、自己成長できる習慣を獲得できるように支援する。
- ・学生が理学療法士の基本的な知識や技術を身につけ、実践的に活用できるように支援する。
- ・学生が対象者と家族、地域社会の課題を俯瞰して捉え、解決する力が身につくように支援する。

3. 方法

- ・地域理学療法学の理論では、事前学習のうえで、授業内で地域リハビリテーションに関するグループワーク、グループ発表、教員による解説を行った。
- ・リハビリテーション職種間連携の基礎では、PT・OT・ST 学生が混在するグループを作り、リハビリテーション職種間連携の台本を提示、ロールプレイの動画撮影、グループ発表を行った。
- ・日常生活活動学の理論では、FIM の段階評価に基づき、動作介助の方法や程度の実技を練習し、実技テストを行った。

4. 成果

- ・地域理学療法学の理論では、授業内でのグループワークでパワーポイントを作成する時間が教員の想定より長くかかり、教員による解説が十分に確保できなかった。
- ・リハビリテーション職種間連携の基礎では、学生は自分が目指す専門職が好きになり、連携する専門職者に対するリスペクトを持つことで、クオリティの高い動画作成と発表ができたと考える。
- ・日常生活活動学の理論では、実技テストでは一部合格に到達しなかったが、概ね動作介助を身につけ、臨床生活支援実習につなげることができた。

5. 改善

- ・地域理学療法学の理論は、授業内のグループワークがスムーズに進むよう、グループワーク課題の内容、パワーポイント以外の方法での発表などを改善する。
- ・リハビリテーション職種間連携の基礎は、次の科目責任者が授業内容をより改善できるように必要なアドバイスを行う。
- ・授業構成、資料のわかりやすさなどの修正を行い、理解が深まりやすくなるようにする。

6. 教育活動

- ・全学 FD 委員会：委員長
- ・理学療法学科 2 年生：副アドバイザー

氏名 根地嶋 誠

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
国際コミュニケーション演習	12	運動器系理学療法治療学	42
国際保健医療福祉論	59	運動学 I	87
運動学 II	84	運動器系理学療法評価学	50
スポーツ理学療法学	12	臨床理学療法評価実習 II	42

2. 理念

教育の目的は自立です。

そのうえで大学教育として大切にしている点は、「支援」です。指導と称し上から目線になってしまわないように心がけています。多くのことを経験し、学び、自ら考え行動する力を養えるように支援します。学生の力が発揮できる環境になることを願います。

理学療法関連では、標準的理学療法を身につけられるようにします。

3. 方法

授業では考えること、発想すること、理解することに重点を置きます。保健医療の学びではどうしても覚えることも必要ですが、それは自己学習で進め、授業ではできるだけ実際に体を動かしたり意見を言い合うような時間にします。

特に運動学では、初学者にとってイメージを持ちづらく難しいという意見があります。そのため多くの動画を用いて理解を促すようにしています。

4. 成果

授業の到達度はおおよそ 7～8 割であり、その学年で学ぶべきことは学べていると考えています。

動画による説明は理解度を高めるようです。

5. 改善

毎年、授業の進め方を調整しています。知識や理解もさることながら、経験および実技や考える機会を増やし習得できるように、時間配分を考慮します。

6. 教育活動

- ・アドバイザー
- ・地域実践アクティブラーニング（小学生対象講座）
- ・硬式野球部，アスリハ塾（トレーナー関連活動，勉強会，地域スポーツクラブサポート）
- ・運動器健診
- ・理学療法勉強会（卒後教育）
- ・国際保健医療福祉プログラム（委員長）
- ・学生支援協議会・学生委員会（委員長）
- ・臨床教育実習委員会（委員長）

氏名 俵 祐一
職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎理学療法学	49	臨床理学療法総合実習Ⅱ	46
理学療法診断学概論	43	内部障害系理学療法評価学	50

2. 理念

私が担当しています基礎理学療法学や理学療法診断学概論は、理学療法の対象である、様々な疾患によって発現する症状・徴候、構造と機能の障害、運動や動作の障害について、解剖・生理・運動学の基礎知識を統合して、その発生および治癒課程を理解・説明し、エビデンスに基づいた理学療法の評価や治療を選択することができることを目標に、臨床場面を想定した学修を展開する必要があります。そのため、学生の皆さんには障害像がイメージしやすいよう、症例提示など具体的な内容を想定して授業展開できるように努めます。

3. 方法

症例を提示し、その背景や現在認めている症状について検討を促し、課題を提示してグループワークを中心に取り組み、プレゼンテーションおよびディスカッションにてさらなる理解を促しています。テーマ毎に小テストを実施し、理解度の確認を行っています。

4. 成果

授業内での定期的に実施する小テストや課題成果物については概ね理解が進んでいるのは確認できますが、最後に全体を網羅した確認テストを行い理解度の確認を行います。基礎理学療法学において昨年度より全体の GPA は上がりましたが、他科目と比べるとまだ低いため、今後も理解度の向上につながる方略を検討していきます。授業評価については全体的に概ね良好な評価をいただいているため、学生の学修意欲に対する働きかけは行っているものと考えます。

5. 改善

課題成果物や小テストにおいては十分取り組んで貰っていますが、筆記による確認テストの成績は十分とは言えないため、知識定着向上に向けて、課題難易度の調整など再検討していきます。

6. 教育活動

セメスター毎のアドバイザー面談の実施. 全学 FD 研修会および学部 FD 勉強会への参加. 学外の教育系セミナーへの参加.

氏名 矢部 広樹

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
内科系医療学	89	理学療法検査測定演習	49
小児理学療法学	49	発展的理学療法学	8

2. 理念

常に授業内容や方法を更新する

3. 方法

アクティブラーニング、グループワーク、e-ポートフォリオ、ルーブリックを駆使する

4. 成果

良好な授業評価を得た

5. 改善

引き続き、e-ポートフォリオ等の利用を継続する

6. 教育活動

教育システム情報学会で発表する

氏名 高橋 大生
職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
機能代償機器学の理論	41	理学療法評価演習	42
機能代償機器学の実践	41	国際リハビリテーション研修 (PT・OT)	11
国際理学療法実習	6	国際リハビリテーション援助論	13

2. 理念

なぜその知識が必要なのか、どのようにその知識は自分の人生に役に立つのか？この納得が非常に重要です。

また、授業内に積極的なアウトプットを促し、知識の定着を図ります。時代に合わせた質問抽出方法やディスカッション技法などを駆使し、学生が自分の考えをアウトプットする機会を造ります。

3. 方法

導入の学ぶ意義については、教員の臨床での実体験を基に講義形式を行うなどの工夫をします。また、各コマの到達目標を明確にし、学生自身がどこまで到達していることが望ましいかを共有します。授業中に周囲と意見や考えをすり合わせる時間を設けアウトプットの回数を増やします。積極的にグループワークや演習、ロールプレイなどを用いて授業を展開していきます。

4. 成果

授業評価から、学生の理解度や目標への到達は概ね達成できていると考える。しかし、授業内（機能代償）のアンケートから、義足の調整技法や異常歩行の動作分析の理解度に課題が残っている状況である。

5. 改善

引き続き主体性を引き出せるよう授業を展開していきます。また、機能代償の実践の授業では異常歩行の動作分析から義足の調整までの一連の流れを演習・グループワークを通して改善していきます。

6. 教育活動

授業以外の人間的成長のための対話もぜひ行っていきます。

氏名 高山 真希

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
理学療法概論	43	日常生活活動学の実践	41
理学療法治療演習	47	臨床理学療法生活支援実習	49

2. 理念

理学療法士としての臨床経験と研究活動や社会活動の経験や実績を基に、学生自身が主体的に考え・行動し、学内のみならず課外活動や臨床実習での学びを深めることができるようサポートする
学生自身が持つ可能性を引き出す

3. 方法

実践的な活動や実技・演習を交え、グループワーク（ディスカッション）やプレゼンテーションで理学療法士に必要なコミュニケーション力や思考力を高め・伸ばす
知識確認テストやチェックリスト、ループリックなどを活用し、重要な要素を理解しやすいように工夫している

4. 成果

学生自身が課題に対して前向きに取り組み、探究することを通して、目標を達成し、成長を実感することができている

5. 改善

課題に対する興味関心が高まるような関わり方や問いかけをすることにより、学生自身が到達目標を明確にし、意欲的な取り組みができるように工夫する

6. 教育活動

アドバイザー：理学療法学科 3 年生副アドバイザー

課外活動・地域貢献活動：浜松市ふれあい交流センター萩原 元気はつらつ教室での運動指導

サークル活動：Su・miling 顧問

硬式野球部：会計担当

氏名 田中 なつみ

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
理学療法診断技術学	49	臨床理学療法検査測定実習	49
運動学演習(PT)	43	理学療法教育マネジメント論	47

2. 理念

学生の学習意欲が喚起されるような教育を行う

3. 方法

知識の提供だけでなくグループワークや発表を通して学生が主体的に学修するような体系を整える

4. 成果

授業を通してグループごとに活動することで学生が主体的に学ぶという姿勢が見られた

教科書などの知識よりも情報が得られやすい媒体を使用することが多く、修正の必要性を感じた

5. 改善

学生が学修する際の知識のもととなる教科書や書籍、論文などの情報提供を行うとともに、教員が確認したうえで授業のファシリテートを学生に実施してもらうことが必要であると感じた

6. 教育活動

21RP アドバイザー

Palpation サークル顧問

氏名 新宮 尚人

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎演習	106	リハビリテーション概論	106
精神医学系医療学 I	89	精神領域作業療法学の基礎	23

2. 理念

基本理念として以下を念頭に置いている。

今の自分に求められていることにきちんと取り組むこと。

その姿勢は、やがて信頼につながり仕事をまかせられる人物として評価される。

具体的には、課題提出の期限を守ること等がこれに相当する。

3. 方法

ハイブリッド型 PBL を実施

授業は以下の通り、3 つの part（PBL、成果発表、講義）で構成され、
PBL→成果発表→講義の順に展開される。

PBL

最初に PBL を実施し、自分たちで考え調べ自分なりの答えを作成する（予習機能）。

成果発表

その後、あらかじめ割り振られたグループの学生が PBL の成果を報告するが、それ以外の学生は自分で作成した資料を手元に置き発表を聞く。学生は発表内容と教員のコメントを聞いて内容の確認や修正をする。

講義

最後に教員は学習のポイントを講義する。という流れをとる。講義ではパワーポイントによる説明の他、テーマに沿った DVD 視聴などを併せて実施し、イメージを膨らませる（トライ・アンド・エラーの確認）。

4. 成果

＜授業評価について＞精神領域作業療法の基礎（2年生 秋セメ）

2024年度は授業評価の対象科目ではなかった。

参考：2023年度では「毎回の目標が明記されて、何について学ぶのか明確であった」とのコメントがあった。

5. 改善

知識定着のために、アウトプットの機会を増やす必要があると考えている。

6. 教育活動

役職上、教員を通じての調整が主であり、学生との直接やり取りをする機会は少ない。

普段から声掛けをしていきたい。

氏名 顧 寿智

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
解剖学 I (Aclass)	83	解剖学 I (Bclass)	83
解剖学	106	運動器解剖学	84
解剖学 II (Aclass)	83	解剖学 II (Bclass)	83
神経解剖学	85	言語聴覚解剖学	17

2. 理念

解剖学では人体の精密で美しい構造の知識を学ぶだけでなく、命の大切さを実感させる教育を行うことができるよう、信念と情熱を持って教育に取り組んでいます。

3. 方法

学生が主体的に取り組むために ICT を活用します。自作した WebClass 教材を学生に提供することで理解を促し知識の定着をはかります。今後の専門科目、国家試験そして実践のための基礎を築きます。

4. 成果

比較的良い教育成果と授業評価を得ました。

5. 改善

1. 講義の内容や順番に関連性を持たせ、理解しやすくします。
2. 分かりやすい言葉を用いて説明します。

6. 教育活動

日本解剖学会会員

コ・メディカル形態機能学会会員

リハビリテーション科学ジャーナル編集委員長

氏名 泉 良太

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
日常生活活動技術学	35	研究法入門	35
運動学演習(OT)	31	作業療法学内総合実習Ⅱ	27
身体領域作業療法評価学	27	神経系作業療法学	23
臨床作業療法評価実習	30	発展的作業療法学	3

2. 理念

座学と臨床が結び付く講義内容

3. 方法

実際の事例の紹介を行い、その時に必要な知識を基礎から説明する。

4. 成果

臨床推論力が向上する。自ら座学、実技の練習を実施する。

5. 改善

イメージの難しい評価や病態の説明について、予習・復習を徹底し、実際の事例を元に説明する。

6. 教育活動

副アドバイザー

氏名 藤田 さより

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域ケア連携演習	87	作業技術学	23
職業リハビリテーション学	35	臨床作業療法総合実習Ⅰ	27
精神医学系医療学Ⅱ	24	保健医療福祉倫理学	24
基礎作業学	41	精神領域作業療法学演習	27
作業療法教育マネジメント論	27		

2. 理念

学生が主体的に学びつつも知識・技術が定着できるよう PBL、グループ学修、演習、視聴覚教材等を多く取り入れる。

3. 方法

常に学生の理解度や意欲を把握し、学生が主体的にまた、確実に理解が進むよう、双方向の授業を展開する。

4. 成果

授業評価では概ね満足の高い結果となった。半面、実習における活用では不十分という意見があった。

5. 改善

学生が興味関心をもって意欲的に学習できるような仕組み、内容を設定するため、視聴覚教材、グループワークの内容を検討したい。

6. 教育活動

地域アクティブラーニング 担当者

リハ学部教務委員長

作業療法教育学会会員

氏名 鈴木 達也

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
作業療法評価学演習	23	臨床作業療法総合実習Ⅱ	27
高齢期作業療法学演習	35	作業科学と作業療法	41
作業療法学内総合実習Ⅰ	30		

2. 理念

人に貢献でき自己研鑽と自分自身の健康も管理できる作業療法士を育成する。そのため、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、学生自身の主体性を育む。

3. 方法

アクティブラーニングの手法を取り入れ、PBL,TBL,プレゼンテーション、反転学習を取り入れる。ICT やウェブツール、臨床に近い方法で演習を行う。

4. 成果

学生が作業療法への理解と関心が高まるように伝えることができた。

5. 改善

作業療法の臨床現場と講義、演習内容が一層結びつくように行った。

6. 教育活動

23 年度生の主アドバイザー、国際保健医療福祉プログラムチューター、プラスバンドサークル顧問

氏名 佐野 哲也

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
高次脳機能障害学(OT)	23	日常生活活動技術学実習	35
臨床作業療法基礎実習	41	卒業研究(OT)	27
運動器系作業療法学	24		

2. 理念

医療技術職識者として、常に最新の技術、知識のみだけでなく、一社会人としての規範を、学生一人一人に合わせた教育を実施する。

3. 方法

身体障害領域の作業療法を中心に、臨床的な思考を最新の知見と合わせて、講義を実施。その後、事例を提示してグループ学習にてコミュニケーション能力、基礎知識をどのように臨床に結び付けるかの応用力を養う実践的な講義を展開している。

4. 成果

臨床作業療法基礎実習では、初めて実習に臨む1年生に対し、過度な緊張をしないよう、知識や心構えの準備期間を2ヶ月前から実施し、実習後にもグループ学習を通じてフィードバックを行い、作業療法士に対する意欲を高めることができた。運動器系作業療法学では、代表的な疾患に対する画像診断を含めた基礎知識から、事例学習での作業療法治療プログラムの立案の一連の流れを伝えることができています。日常生活技術学実習では、日常生活動作の低下をどのように改善させ、自宅退院に結びつけて臨床では実施していくかを、ADL実習室の更に利便性を向上させ、実技を中心に行い、臨床実習でも日常生活評価が実施しやすくなった。高次脳機能障害学では、TBLを取り入れ、能動的に学習に取り組むように促した。また、当事者の家族会を招き、在宅での当事者のかかわりについて深く学ぶ機会を提供した。卒業研究では、研究の基礎と魅力について学ぶことができるようにOT学科教員の協力のもと、実施できた。

5. 改善

臨床実習では、対象者や療法士とのコミュニケーションが共通した課題である。1年次の基礎実習の

準備期間でもコミュニケーション技法について学習する機会を検討する。
個々の学習の進み具合に応じて、講義方法や課題を検討する必要がある。

6. 教育活動

1年生のアドバイザーとして、OT 学科教員と協力しながら学修面・生活面へのフォローアップを行っている。特にレポートの作成方法と定期試験への取り組みについてスケジュール管理もあわせて、重点的にサポートしている。

氏名 飯田 妙子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
精神領域作業療法学の応用	35	臨床作業療法応用実習	24

2. 理念

リハビリテーション専門職者として、必要な専門知識・技術の習得だけではなく、社会を構成する一員として、多様な人々と関わる際に大切な「社会人基礎力（考える力、行動力、対人関係力）」を獲得できるような教育、学生支援を実践している。

また、精神・発達領域を専門にしていることから、大学生という転換期の中で様々な課題に直面する学生の心身に寄り添ったサポートを心がけている。

3. 方法

授業では、精神・発達領域の最新のトピックスや自身の臨床経験を講義に取り入れ、学生が教科書等で獲得した知識を実践に発展できるような内容を提供している。

また、現場で必要な臨床思考、行動、対人関係力を向上できるよう、学生が主体的に学べる環境設定を行なっている。

4. 成果

授業評価アンケートでは、高い評価をいただいている。特に「自身の成長を実感できた」学生が多かったと考えられる。一方で、知識の定着には時間がかかる領域であることが GPA に現れていると見られる。

5. 改善

学生の学びが知識の定着につながるよう、学生の理解度を定期的に図る試みを取り入れていきたい。

6. 教育活動

1年生のアドバイザーとして、大学生活に慣れるまでの学修・生活面のサポートを学科教員、関係部

署と協力し、重点的に実施した。その結果、学生間でのサポートがよく見られる学年になった印象を受ける。

また、産学連携 WG のリーダーとして、杏林堂薬局と連携し、地域実践のアクティブラーニングの機会の創出、東海北陸学会での発表を行なった。

氏名 栗田 洋平

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域作業療法学	35	高齢期作業療法評価学	35
ボランティア演習	78	作業療法評価学総論	41
高齢期作業療法学	23		

2. 理念

本学の建学の精神である『生命の尊厳と隣人愛』を身に付ける機会として、授業内にグループワークを実施する機会を設け、学生同士の互助を促し、他者を尊重しながら学習活動を進めていくように指導している。

また、本学の卒業生である点、学科内で最も学生と年齢に近い点を活かした関りを心掛けている。

3. 方法

授業では、知識を伝えるだけでなく、グループワークや演習を通し、学生が主体的に考え、行動する能力を身に付けることができるよう工夫している。

また、自身の臨床経験を基に具体例を挙げながら知識を伝えることで、学生が学んだ知識をどのように作業療法士として活かすのかイメージしやすいようにしている。

4. 成果

授業時のアンケートでは、理解度が【よく理解できた】、【ほぼ理解できた】との声が多い。

専門性が高い授業では、教員からの一方的な教示が多くなる傾向にあるため、そのような授業においても如何にして学生の主体的な学びを引き出すか検討する必要がある。

5. 改善

科目責任者として5科目を担当してたが、GPA2.1~3.2と偏りがある状況である。学生の状況に合わせて、授業内容・課題を調整しながら作業療法士として必要な知識・技術が習得できるように学習の促しを行う。

6. 教育活動

3年生のアドバイザーとして定期的・必要時に面談を実施した。今後の学生進行も踏まえ、学生が教員と協働して学習が進められるように心がけている。

地域活動としては、認知症予防講座に参加する学生のサポート・引率を行っている。学生が地域に興味を持つ機会になるよう継続してサポートをしていきたい。

氏名 谷 哲夫
職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
失語症学	17	失語症治療学	27
臨床言語聴覚療法総合実習Ⅰ	26	臨床言語聴覚療法総合実習Ⅱ	25
失語・高次脳機能障害治療演習	27	流暢性障害学	26
臨床言語聴覚療法評価実習	27	言語聴覚障害学総合演習	27

2. 理念

失語症学・流暢性障害学の理念は、失語症患者や流暢性障害者が日常生活でコミュニケーションが円滑に取れるように、言語機能を回復または補填し、生活参加を促す方法を学修することを目的としています。具体的には、最新の知見を土台とした言語聴覚療法（言語療法）の実施、患者の個別ニーズに合わせた言語能力の向上、コミュニケーションの促進と生活の質の向上を実現するリハビリを実践できる言語聴覚士の養成を目指します。この理念の遂行のため、本学の研修制度を利用して現場の臨床に携わり、言語聴覚士とも情報交換をしております。

3. 方法

2年次の授業は座学が多いので、現場の言語聴覚士の働きぶりが分かる、研修制度で臨床をしている病院の動画を視聴します。

3年次では演習授業が多くなるので、実際の当事者と言語聴覚士の臨床場面の動画を視聴します。

また、これらの動画はWebClassに登録し学生が指定期間中であればいつでも視聴できるようにしております。

最近の学生は挙手して質問することに消極的なのでWebClassで質問を受け付け、授業中にクラス全体で共有する形で回答するようにしています。

4. 成果

基本的な専門用語と症状との関連は学修する必要があるのですが、繰り返しポイントを説明し、また、授業外に補講も実施しておりますが、失語症学では昨年には3名の再履修者を出しています。

5. 改善

動画視聴は即時的にイメージをするには良い方法ですが、学問としての深い理解に繋がりにくい面

があります。

授業における動画視聴と理論の説明とのバランスが重要です。

学年によって学力や雰囲気が大きく異なるので、授業の進度は毎回の復習テストで学生の理解度を確認しつつ進めています。

復習テストの成績が全体的に低い場合は、授業計画の予定を変えて一部前回と同じ授業をすることもあります。

6. 教育活動

◆しずおか言友会（吃音者の自助団体）の顧問をしています。

これまで卒業生の卒業研究などの協力を依頼しております。

◆群馬失語症友の会会員

失語症の方に授業協力を依頼しております。

◆教育支援者

大学の教育改革推進経費で三方原地域の元気な高齢者に本学の教育支援者になることを依頼し組織しております。

既に複数回の授業に協力いただいております。

氏名 小坂 美鶴

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
言語発達学	22	言語発達障害学	17
言語発達障害治療学	27	音声学・音響学演習	17
言語発達障害評価演習	17	言語発達障害治療演習	27
小児構音障害学	17		

2. 理念

言語聴覚士の専門基礎科目、専門科目であり、専門家としての自覚を持ち、知識と技術を身に付けるための授業を行う。

3. 方法

授業当日に身に着けられるように、今年度は授業後にミニテストを行い、それぞれの学生の知識を確認できるようにする。

4. 成果

ミニテストの点数をそのまま返して、解答は示すも解説する時間がなく、それぞれの学生が真に理解できたかは明確ではなかった。

5. 改善

少しの時間でも解説して理解を深めるようにしていく。

6. 教育活動

研究を通して自らの論理的思考を深める。

氏名 大原 重洋

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
臨床医学・医療学概論	106	聴覚障害学	20
小児聴覚障害学	27	小児聴覚障害演習	27
聴覚心理学	17	聴覚機能評価演習	17
成人聴覚障害学	26	聴覚補償演習	26
拡大代替コミュニケーション演習	25		

2. 理念

聴覚障害学に関わる科目群について、聴覚障害が「聞こえ」の制約にとどまらず、日常生活全般において多面的な困難をもたらすことへの理解を深め、聴覚障害者が社会の中で自立して生活できるよう支援するための理論と実践的技術を学ぶことを目的としています。特に、乳幼児期から高齢期に至る各発達段階において、聴覚障害が個人の発達や生活にどのような影響を与えるかを多角的に捉え、聴覚や言語・コミュニケーション能力、発達の特性に応じた評価と補償機器の活用を基盤に、個別性に配慮した指導プログラムの構築と実施に必要な実践力の養成を目指します。

3. 方法

授業では、理論と実践の両面から学びを深めることを重視し、学生が支援現場で即戦力となるための基礎力と応用力を養うことを目指しています。講義形式により聴覚障害に関する基本的な知識や理論的枠組みを丁寧に解説するとともに、演習・実習を通じて現場に即した支援スキルの習得を図っています。また、最新の研究成果や技術動向を反映した教材を取り入れ、学生の関心を高め、主体的な学びを促進する工夫も行っています。特に、地域の聴覚特別支援学校との連携による実践的な演習では、学んだ理論を現場に応用する力を育成し、実践知の定着を図っています。さらに、指定規則では聴覚障害学に関わる科目が多岐にわたることから、それぞれの科目を有機的に関連づけ、4年間を通じた体系的・段階的な学修が可能となるよう、科目群パッケージとして一貫性のあるカリキュラム編成を行っています。

4. 成果

本年度の授業評価結果を踏まえると、全ての科目において「説明のわかりやすさ（q1）」が高く評価されており、学生に対する丁寧に明確な説明が一定の成果を上げていることがわかります。特に「臨床医学・医療学概論」（3.59）および「小児聴覚障害学」（3.52）では、説明の工夫が伝わっているこ

とがうかがえます。

また、「聴覚障害学」においては、学生の意欲（q4：3.82）および自身の成長実感（q6：3.82）が最も高く評価されており、講義形式でありながらも、学生の内発的動機づけを高める工夫が奏功していると考えられます。

「小児聴覚障害学」においても、興味を引き出す工夫（q2：3.48）や学生の意欲（q4：3.61）が比較的高く、内容の実践的な関連性が学習への動機づけに繋がっていることが示唆されます。

一方で、「成人聴覚障害学」では全体的に評価がやや低く（平均：3.09）、特に「授業計画通りの実施（q3：2.85）」や「目標を達成できたか（q5：2.9）」の項目に課題が見られました。このことから、計画性の明示や学習目標の再確認、進捗管理の強化が今後の改善点として挙げられます。

総じて、学生が能動的に学べる環境づくりとともに、学習目標の明確化と達成支援をさらに充実させることで、授業の質をより一層向上させていきたいと考えています。

5. 改善

本年度の学生評価を踏まえると、「成人聴覚障害学」では授業計画通りの実施（q3）および目標達成度（q5）の評価が低く、進行の見通しと学習成果の実感に課題があることが分かりました。これに対し、各授業回での目標提示や振り返り活動を強化し、フィードバックの機会を増やすことで、学生の学びを可視化し、成長の実感につなげる工夫が求められます。また、全体的に成長実感（q6）や意欲（q4）の評価をさらに高めるために、グループ活動や実践的課題を導入し、主体的に学べる授業設計の強化が必要である。双方向性のある授業運営と明確なゴールの提示により、学習効果の向上と学生満足度のさらなる改善が期待されます。

6. 教育活動

今年度より、2年生主アドバイザーとして、個別の相談を通じて、学生一人ひとりのニーズに応じたアドバイスを提供しました。

さらに、学内外でのセミナーや講演会で講師を務め、聴覚障害に関する啓発活動を行っています。学生だけでなく、地域社会に対しても聴覚障害への理解を深めることに貢献しました。

氏名 黒崎 芳子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
高次脳機能障害学(ST)	28	言語聴覚学研究法	25
神経系の構造・機能・病態	21	失語・高次脳機能障害評価演習	17
言語聴覚学研究法演習	24	卒業研究(ST)	2

2. 理念

多様性の時代に対応できる人間性豊かな言語聴覚士を目指しましょう。

3. 方法

講義では、確認テスト、リフレクション・ペーパー、口頭試問などを用い、学修状況の確認を行います。

演習では、各グループでのディスカッション、実技演習を通じたアクティブラーニングを行います。

4. 成果

講義・演習とも、専門的知識と臨床が結びつくよう、学生の知識や経験（レディネス）を配慮した導入・展開を行った。

5. 改善

講義ごとに実施する確認テスト、リフレクション・ペーパー、口頭試問などに基づき、学修状況の確認を行い、学修目標の達成段階に応じた授業を展開します。

演習では、グループ活動において対話を通じた深い学びが得られるよう工夫してゆく。

6. 教育活動

4年生アドバイザー、学生委員、国家試験対策委員長

氏名 佐藤 豊展

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
言語聴覚障害診断学	27	摂食嚥下障害学概論	40
成人構音障害学	27	発声発語障害評価演習	27
臨床言語聴覚療法基礎実習	22	発声発語障害治療演習	27
摂食嚥下障害総合演習	26	地域言語聴覚療法学	25

2. 理念

言語聴覚士は摂食嚥下障害や運動障害性構音障害のリハビリテーションに関わる頻度が高い。国家試験に対応できる知識を獲得することはもちろん、将来臨床場面で診療ができるよう、理論と演習を通して知識・技能を獲得することを目的に行っている。

3. 方法

講義は事前学習、授業、事後学習の形式で行っている。授業では座学および演習を通して教授している。授業では大切な点を強調したり、複数回述べたりしている。授業中に1～2分程度の休憩時間を取り、授業内容をリハーサルできるように工夫をしている。また、視覚的に理解できるように促している。事後学習では小テストを作成し、理解の定着を促すようにしている。

4. 成果

「Q.1 説明のわかりやすさ」と「Q.2 興味を引き出す工夫」、「Q.3 授業計画通りの実施」、「Q.4 学生が意欲を持てたか」の3項目では、すべての科目で3.3以上であった。

「Q.5 目標を達成できたか」では、3.2を切っている科目が多数であった。

5. 改善

「Q.3 授業計画通りの実施」は、学生の理解度を確認しながら進めているが、事前学習を充実させるなどして、計画的通りの実施を心がけたい。

国家試験や臨床のことを考えると、到達目標を下げることは難しい。事前学習や事後学習を有効に活用し、授業評価の結果を向上させたい。

6. 教育活動

1年アドバイザーとして、学生生活や学習支援を行った。

氏名 Kuramoto Christine Dianne

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
英語 I (月 1)	28	英語 I (月 2)	28
英語 I (火 1)	27	英語Ⅲ（看護英語）	31
入門リハビリテーション英語（英語Ⅲ）（ST）	17	英語Ⅱ(月 2)	26
英語Ⅱ(月 5)	28	英語Ⅱ(月 6)	29
入門リハビリテーション英語（英語Ⅲ）（PT の A）	25	海外研修	9

2. 理念

I want to help you enjoy the many things you can do with English. Studying English can be a tool that leads you toward your goals and dreams. English can be an asset to you for making friends, furthering your career, understanding world research, learning about other cultures and more. I want to help you figure out what you want to use the English language for and motivate you to reach for your goals.

英語を使ってできる多くのことを発見する手助けをしたい。英語の勉強は、あなたの目標や夢の方向へ導いてくれるツールになります。友達作り、キャリアアップ、世界研究の理解、異文化学習など、英語はあなたの財産になります。私は、あなたが英語を何のために使いたいのかを見つけ、目標に向かってモチベーションを上げられるように指導したいと思います。

3. 方法

I aim to develop the four skills (listening, speaking, reading, and writing) comprehensively, with an emphasis on communication. I try to provide many opportunities for students to use their English through presentations, conversations, and other activities and assignments.

コミュニケーションを重視し、4技能（聞く・話す・読む・書く）を総合的に伸ばす。プレゼンテーション、会話、その他のアクティビティや課題を通して、生徒が英語を使う機会を多く設けるよう心がけています。

4. 成果

I am learning along with you as you take my course. I appreciate your input and effort in helping make this a beneficial experience. I am so proud of the effort that every one of you put into learning!

皆さんが私のコースを受講している間、私も皆さんと一緒に学んでいます。私のコースが皆さんにとって有益な経験となるよう、皆さんのご意見やご尽力に感謝しています。皆さん一人一人の学習にかける努力を誇りに思います！

5. 改善

I will continue to adjust to the needs of my students. I will try to keep the class pace at a level that suits each unique group of students.

これからも生徒のニーズに合わせていきます。それぞれの生徒の個性に合ったレベルで、授業のペースを保つよう努めます。

6. 教育活動

I attend academic conferences and read research to continue growing as a teacher. I collaborate with other professionals to create meaningful and relevant study materials for my students.

教師として成長し続けるために、学会に出席し、研究に目を通す。他の専門家と協力し、生徒にとって有意義で適切な学習教材を作成しています。